

# 琉球大学学術リポジトリ

小学校社会科の「学習理解を深めるための対話」に着目した授業改善  
—「社会的な見方・考え方を視点とした学習」と思考ツールの活用等を通して—

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者: 琉球大学大学院教育学研究科<br>公開日: 2022-05-25<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 目取眞, 堤<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.24564/0002017961">https://doi.org/10.24564/0002017961</a>                           |

# 小学校社会科の「学習理解を深めるための対話」に着目した授業改善 —「社会的な見方・考え方を視点とした学習」と思考ツールの活用等を通して—

目取眞 堤

琉球大学大学院教育学研究科高度教職実践専攻・宜野座村立宜野座小学校

## 1. テーマ設定の理由

令和3年度版の沖縄県学力向上推進5ヶ年プラン・プロジェクトIIの考察に、「教育活動全般を通して、既存の知識・技能を生かしながら、目的意識を持ち、自分の考えを書いたり、交流活動を通して自分の考えを深めたり広げたりして明確に伝える、振り返りを通して自分の考えを整理するなど、思考力・判断力・表現力等の育成が今後必要である。」と記されている。これはつまり、習得した知識・技能から次の課題を見出したり、自分の考えを深めたり広げたりするため対話等が不十分だったこと。また、振り返りから今日の学びを実感させる授業が日頃からうまくできていなかったことを表している。

勤務校においても、特に上記のような「自分の考えを深めたり広げたりして明確に伝える」ことに課題が見られた。小学3年生の「店ではたらく人と仕事」という社会科の単元において、「安全・品質・売り上げ」など、教科書にある知識は覚えているが、「地元の商店を減らさないためのくふうは？」という問いに対しては、「安全な商品を置けばいい」や「売り上げがよくなる商品を置けばいい」など、商品に関する意見が多かった。また、自分の考えがまとまらず、友だちの意見を聞くだけの児童も数名いた。つまり、教科書にある知識は覚えているが、社会科の見方・考え方を活用して問題を解くことがうまくできなかったのである。このように、知識の活用がうまくできず、学習理解が低い子が多いことに気が付いたのは、単元終了間際だったため、学習時間を1時間追加することになった。こうなった原因として、まず、学習理解を深める場面での工夫が足りなかったことと、見る視点や考える視点の提示、そしてうまく考えがまとまらない子への手立てが不十分だったことが挙げられる。

## 2. 研究の目的

本研究では、小学校社会科の学習において、自分の考えを深めたり広げたりするためにペアやグループでの対話を取り入れるとともに、うまく自分の考えがまとまらない子への手立てとして、「社会的な見方・考え方カード」や「思考ツール」などを活用していく。また、対話から児童の学習理解度を診断し、そこから授業改善につなげることを目的とする。

## 3. 本研究に関連する先行研究

田島(2009)は、「日常経験知の意味を取り込まない概念を暗記する生徒達の、『分かったつもり』と呼ばれる学習傾向を改善するためには、内容を知らない他者に説明していく中で、両者共に納得できる新たな意味を交渉していく対話が必要になる」と述べている。つまり、他者との対話なしの概念理解は「分かったつもり」が多く、他者との対話が概念理解には重要になると述べている。資料内の授業では、理科においての実践があり、そこでは1回目と2回目の説明活動での伸びを評価対象としている。そして、この活動の特徴は、前もって質問を予想し、それに対する答えを書かせていることと、自分と相手が共に納得できる新たな意味を交渉していくところにある。最後に田島は、この他者との対話における説明活動が有効かどうかは、理科以外で検証が必要だと述べている。

#### 4. 研究内容

本研究では、先行研究における「概念理解の深め方」につなげるための「対話」を研究の中心とする。また、その対話を充実させるための「思考ツールの活用」と自らの授業を振り返るための「評価計画」を取り入れることにより、「分かったつもり」から「自分なりの考え」をもつ授業の流れを研究していきたい。

##### (1) 学習を深める概念理解とは

概念理解は、各教科等の知識及び技能を「活用」するために必要なものである。つまり、子どもたちは、自分の生活経験からの学びと、各教科の知識などを結びつけ、自分なりに一般性を習得していく。その一般性を活用して問題を解決していくことがこれからの時代に求められている。例えば、「魚には血が流れていない」と答えた事例がある小学校低学年の児童も、自分が怪我したときに流れた血と教科書で学んだ生き物の体の仕組みを結びつければ、人や動物、魚やミミズなど、生き物には血液が流れていることが理解できる。そして、その自分なりの一般性としての概念を身につけるために必要なのは「他者との交流」であると言われている。

##### (2) 他者との交流としての「対話」

自分の生活経験からの学びと、各教科の知識などを結びつける概念習得には、やはり、何度も自分なりに考え直したり、問い直したりすることが必要となる。この考え直したり、問い直したりするために、他者の存在はとても有効になる。つまり、他者がいて、自分の考えを理解してもらうには具体的な事だけでなく、例え話を入れたりするなど、視野を広げざるを得なくなる。要するに、他者に理解してもらうために自分の考えを抽象化する必要がでてくるのである。この抽象化ができれば、他の問題にも応用できる概念となる。そして、相手との対話をスムーズにするには、話す内容を前もって自分なりに考えておくことが必要となる。しかし、それを苦手とする児童がクラスには一定数いる。この自分なりの考えをまとめることが苦手な子に有効なのが思考ツールであると言われている。

##### (3) 教材教具の工夫（思考ツール）

教科の見方・考え方に視点をおきつつ、対話を通して概念理解を促すためには、児童にとって思考しやすいものが必要となる。児童の断片的な知識を多く出させ、それを各教科の見方・考え方等に視点を置いて収束する活動に有効だと言われているのが思考ツールである。特に、「マインドマップ」「クラゲチャート」等は、児童の思考をまとめるものとして有効である。しかし、「自分なりの解釈」や「例え」を書くような思考ツールは今のところ見当たらない。よって、「自分なりの解釈」や「例え」などを入れたオリジナル思考ツールの開発も検討していきたい。

#### 5. 研究の進め方

##### (1) 評価計画の作成

単元の評価計画として、「診断的評価」「形成的評価」「総括的評価」「自己評価」を位置付ける。特に、単元中盤における「形成的評価」においては、低位・中位・高位の児童を数名選び、「社会の見方・考え方を視点にした学習理解度」「授業への没入度合い」をチェックする必要がある。そして、今回は「対話」を形成的評価の一つとして位置付けていきたい。つまり、単元中盤からの対話を通して、児童の学習理解度を分析した授業改善を行い、単元最後のパフォーマンス課題までの伸びを評価の対象としていきたい。

##### (2) パフォーマンス課題の設定について

パフォーマンス課題は領域によって課題を設定する必要がある。つまり、社会科の枠組みには、「地理的環境と人々の生活」「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」「歴史と人々の生活」があり、年間を通して繰り返し指導できるようにしたい。また、各領域における問いの例として、「あなたが〇〇なら、こ



## 7. 考察

### (1) 研究内容からの考察

#### ①学習を深める概念理解について

今回の実習において、自分の生活概念と各教科の知識などを結びつけ、自分なりの一般性としての概念を身につけることが不十分であった。特に、市役所の防災会議については、児童の生活概念とうまく結びつけるような問いが準備できなかった。児童の生活と結びつけにくいような概念理解については、今後も研究を進めていきたい。

#### ②他者との交流としての「対話」について

他者との交流の場面では、ペアやグループで自分たちの意見を順位付けする活動をおこなった。子ども達は、理由も言って順位を決めており、そこで学習理解が深くなると予想していたが、意外とあっさり順位を決めていた。今回の実習で、防災倉庫に入りたい物の順位付けだけでは、学習理解が深まらないと感じた。次回の実習では、交流ありきではなく、学習理解を深めるために対話が必要だと感じさせ、そこに学習の本質が見えるような問いを用意したいと感じた。

#### ③教材教具の工夫（思考ツール）について

学習の中で、自分の考えを広げ、その考えをまとめるために思考ツールを子ども達に紹介した。アンケートの結果、「クラゲチャート」「ピラミッドチャート」などの思考ツールが特に使いやすかったとの声が多かった。しかし、思考ツールは学習理解を深めるための一つの方法にすぎない。よって、今後は、児童が学習理解を深めるための選択肢の一つとして、思考ツールを提示できるような授業を展開していきたい。

### (2) 今後の研究

今回の実習において、理解力の低い子の対話を観察していると、お互いの対話が続き、すぐに終わってしまう場面が多々見られた。よって、理解力が低い子の対話についても今後は研究していきたい。また、「社会的な見方・考え方カード」「思考ツール」においても、低位の子も使いこなせていたかが気になるので、それも今後の研究につなげたい。この研究を続けるにあたって気をつけたいのは、本研究は「学習理解を深める」ことが目的ということである。つまり、「対話」「社会的な見方・考え方カード」「思考ツール」を実施することが目的ではなく、必要に応じてそれらを活用していくような授業を試みたい。

## 引用文献

石井英, 2021, 『ヤマ場をおさえる学習評価』 図書文化.

田島充士, 2010, 『「分かったつもり」のしくみを探る』 ナカニシヤ出版.

田島充士・森田和良, 2009, 「説明活動が概念理解の促進に及ぼす効果」『教育心理学研究』57 (4) : 478-490.

那須正裕, 2017, 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 東洋館出版社.

西岡加名恵・石井英真, 2019, 『教科の「深い学び」を実現するパフォーマンス評価』 日本標準.